

日本語の新たなリテラシー

上松 恵理子

Abstract

The concept of literacy is multi-layered and complex. Japanese language education, with its study of 'kanji', has a specific concept of literacy that differs from other languages. The current model of literacy in Japanese language education focuses on improving skills such as reading, writing and speaking. However, students can develop a deeper understanding of texts when they have an appreciation of the context in which they were written. Use of the new model, in which understanding of context added to the traditional emphasis on basic skills, can help students enhance their understanding texts written in the Japanese language.

キーワード……リテラシー 日本語 コミュニケーション

はじめに

リテラシー (literacy) とは、語源リテラ (littera) がラテン語で文字を意味する語であるということから、西洋ではもともと、文字の読み書き能力のことであった。さらに、literate とは教養があるという意味であることから、リテラシー (literacy) とは読み書きの素養がある、と捉えることができる。このような素養を前提としたテキストの様々な文脈の中で、読むことの様々なリテラシーとは、(現代社会における素養とは) 様々な溢れる情報を受容し、精査し、歴史・文化・社会のあらゆる教養と結びつけることができ、その意味を奥深く理解し、読解できる豊かな能力と言い換えることができる。

西洋において、学術用語などの読み書きは、ラテン語、ギリシャ語などの知識や教養がなければできないことが多い。しかし、日本語には、日本語の文字としての特性がある。例えば、長文であっても、漢字かな混じりの文で書かれている場合、日常の漢字の知識だけで、文字のイメージが理解しやすい。また、同音異義語などの漢字が文章に入ることによって、より言葉の内容を具体的にとらえやすいといった、日本語にはアルファベットにない文字の可能性を持っている。また、日本人はテキストを読む場合、目の前の言葉 (漢字や平仮名等) と、自分の得た情報の中にある知識や教養と照らし合わせて読むのが一般的である。日本人は言葉に言霊を信じ、ヨハネ伝に記されているロゴス信仰とは異なる¹⁾読みを持つ。これらのことや、表記上の特質を理解することが、日本語のリテラシーであるといえる。しかし、日本語は江戸時代

から明治時代へ移行するにあたっては、紆余曲折があった。このような背景から、明治時代の日本語のリテラシー概念と現在のリテラシー概念をみていくことによって、読むことのリテラシーの変遷を捉えることができるのではないかと考えた。本稿では、このリテラシーを考察する上で、明治時代を日本人にとって重要なリテラシー概念転換の時期ととらえ、日本語のリテラシーとは何かをみていく。

1 日本語のリテラシー

西欧の伝統的なリテラシーとは(読むことの歴史の中で)伝統的な教養ある階層を飾るもの²⁾である。例えば、それは、聖書を読むことであった。そして、それに次ぐ新たに識字能力をつけた階層が増大することは読書層の拡大につながっていく。一方、日本においては、明治維新前、寺子屋という制度のもとで、武士や富裕層が漢学の素養を培っていた。中世まではそれが貴族・学者・僧侶などの一部の知識層だけにとどまっていたのに対し、江戸時代になると、支配層である武士の一般的な素養として漢学が位置づけられ、その影響がさらに下層にもおよぶようになった³⁾という過程がある。日本と西欧ともに共通するのは、識字者と非識字者には階層区分があったということである。同じ時期でいえば、ヨーロッパ社会においてギリシャ・ラテン語がそれにあたる。日本語の近代化は、明治時代後期の言文一致運動を1つのエポックとしている。しかし、明治に入って「漢学は『漢文』としての国語科教育の一部に矮小化され、かわって英語が、最重要の教科として登場することになった⁴⁾。そして「パンのための学問」⁵⁾や、「教養教育の不成立」⁶⁾によって、明治以降において、あらゆる階級に教育の機会をもたらしたのである。

明治維新の開国に伴い、外国の言葉を日本語化した外来語などの多くが流入したことによって、語彙は膨大になる。明治時代は書き言葉と話し言葉が、また、身分や性別、様々な文学ジャンルによっても用いられる文体が、異なっていた。この弊害を、なくそうと試みる言文一致運動が起こっている。これには「<漢字廃止によるかな書き論>と<ローマ字文化論>という二つの流れがあった」⁷⁾という。言文一致運動に反対する勢力の意見とは、「口語文がこれまでの漢字体にくらべて文学的にも学術的にも劣っている」⁸⁾という考え方である。<かな書き論>とは前島密によるものであり、この内容は、「漢字学習に多くの時間を費やすような、不経済な教育を改め、余った時間や知的なエネルギーを他の活動に使うべきだという主張」⁹⁾であった。一方、<ローマ字文化論>とは、当時のヨーロッパが日本よりも文明が発達していた点を踏まえている。ヨーロッパで使用されていたアルファベット文字が26文字である。しかし、日本の「いろは」48文字の価値の発見がなされたことにより、この48文字を日本の文明開化を可能とする文字システムとして捉えなおすというものがこの主張である。また、<ローマ字文化論>の背景には、「日清戦争勝利以後、武力で勝っても清の文字を使っている限り負けてい

るとの感情」¹⁰⁾があった。さらに、その考え方が後押しし、〈新国字論〉が起こる。〈新国字論〉とは、次のようなものであったという。

- 1、 神代文字を改作しようとするもの
- 2、 漢字を改作しようとするもの
- 3、 平仮名を改作しようとするもの
- 4、 カタカナを改作しようとするもの
- 5、 カタカナ平仮名を取捨混淆して改作しようとするもの
- 6、 漢字を仮名と取捨混淆して創作しようとするもの
- 7、 ローマ字と仮名とを取捨混淆して創作しようとするもの
- 8、 明盲共通文字を工夫しようとするもの
- 9、 視話文字を採用しようとするもの
- 10、 速記文字を採用しようとするもの¹¹⁾

しかしながら、日本の場合、文に漢字を入れ込む漢字かな混じり文の方が理解しやすいといったことから、漢字廃止論はおのずと消えていく。こうして、かな書きやローマ字書きが消えていった¹²⁾のである。「明治期になって、ようやく漢字カタカナ混じり文が普通の形式となり、近世以来の庶民的な表記形式である、漢字ヒラガナまじり文が普通の形式となり、近世以来の庶民的な表記形式である、漢字ヒラガナまじり文とはりあいながら、第二次世界大戦後まで、その権威をたもった。漢字ヒラガナまじり文は、言文一致期以降、一般的な形式となったが、法律や公用文などで、それが普通の形式となったのは、せいぜいこの十年あまりのこと」¹³⁾である。同音異義語を区別する機能としては、漢字は不可欠であった。文字の種類は文明の発達段階の表象であり、日本語における漢字かな混じり文は、世界でも類をみない段階を踏んだ表象であったことが考えられる。明治以降、アルファベットの単語を日本語に組み入れる際、上手く漢字に当てはめ、文章に組み入れることに成功した例は、このような日本語の特徴を熟知したものと考えられる。つまり、漢字廃止論が消えていく大きな原因としては、漢字の意味生成作用が秀でたものであったからであるが、漢字かな混じり文は、日本語の和語に漢字の意味生成作用の特性を当てはめた成功例である。

アルファベットの単語は、いわゆる外来語として日本語に組み入れられている。これまでに行われた日本語の語彙調査（これは一般の語であり、ファッション雑誌などや、広告などに使われる語であれば、相当数に増えるものと考えられる）¹⁴⁾のうち、このような結果がある。しかし、これらの言葉の受け手は、その属性などによって、理解度が変化すると思われる。

日本語は和語や漢語と結合して、いわゆる和製英語や日英混成語を作る形¹⁵⁾で様々な意味を表象することができるのである。石野は実際、外来語と言われる言葉の中の半数に近いものが

和製英語であることを述べた上で、外来語の欠点を5点あげている。

- 1、語形が長くなりすぎ、そのため造語能力を欠くこと。
- 2、外来語は専門用語などがあり、難解で、受け手がインテリ層に限られる場合がある。
- 3、外来語が単なる知的伝達ではなく、受け手の情緒的満足感のために用いられ、そのため、受け手は知的に受け取る習慣を失い、感覚的に受け取ってしまう。
- 4、外来語は借り物であり、日常語にはないもので、言葉の上の思考にとどまる。
- 5、ナショナリズム的発想において、日本語の伝統の無視であり、日本語の美しさを損なうものである¹⁶⁾。

これらは、外国の言葉が日本語の外来語として組み込まれることの問題点としてあげられている。例えば、外来語を使うということに関して石野は「多少誇張して言えば、限られた階層の人たちへのみ許された、一種の特権というべきもの」¹⁷⁾とまで言い切っている。これは、外来語を理解でき、自由に使いこなすためには、世の中の新しい動きに敏感でなければならない、そして、各種の専門的な事柄についての基礎知識があり、興味や関心を持っている必要があるというのである。ある程度高い素養を有することが必須なのである。これらの素養と、日本語の利点である漢字かな混じり文の特性を理解することは、日本語におけるリテラシーである。

2 日本語文字のイメージとリテラシー

アルファベット圏と異なる日本語文字のイメージが存在する。日本語は漢字かな混じり文である。そもそも、言葉と図像はコミュニケーションにおいては、根底で結びつき、繋がりがあある。「図像と文字は歴史的につながりがある。イメージから文字が生まれたことは、揺るぎない普遍的な特徴であるように思われる」¹⁸⁾とされているように、図像と文字の深い類縁性が考えられるのである。

高橋は日本語における特質を、図像的イメージとしてとらえている。

日本の表現者たちは、象形文字（ヒエログリフ）としての漢字とそれを変形した音声文字としての仮名の両方を使用するという、独自の文学大系を意識化し、多様な実践を試みていた。例えば小説の標題（タイトル）の、字面自体が抱きかかえ、あるいは隠し秘めている図像的イメージに、テキストの仕掛けが暗示されているような実践は1920年代から1930年代にかけて、多くの作家たちによって行われている¹⁹⁾。

このように述べた上で、例えば芥川龍之介の「羅生門」は本来「羅城門」であるにもかかわ

らず、わざわざ誤字を使用し、「生」を「羅（あみ）」にかける「門」という意味作用を発生させていることにも言及している。また高橋は、そもそも生原稿は「手書きの筆跡にさまざまな身体性を内包している」のであり、その「痕跡性」は活字に組み込まれることによって喪失するというのである。また、グーテンベルク以降、文字が、メッセージやイメージのメディアとして機能する比重は大きくなってきていることを次ぎのように述べている。

＜文字＞という現象が印刷文化の中で制作され、印刷インクのしみの羅列を載せた紙の束からなるモノ（商品）としての文学の大量生産 その購入と消費、受容といった流通のサーキュレーション・システムの中に置かれるようになると、視覚的な記号である活字としての文字がメッセージやイメージのメディアとして機能する比重は、計り知れぬほど大きくなった。こうした中から文学と美術、つまり共に＜手＞や＜指＞といった身体の作用の痕跡を活字や絵具といったマテリアルなモノを媒介にして覆い隠したうえで、視覚を通じて受容される表現行為が問題となってくる²⁰⁾。

この結果「^{イコノロジー} 図像論（＝文字言語を扱う文学研究と美術史研究との境界領域として）」という定義が出てくるのである。文字に図像としてのイメージが組み込まれ、それによって、受け手がすべてを包括した意味の解釈がなされるのである。

カッシーラーは「言葉は心像（イメージ）やいろいろな情緒をこめられたものであり、知性に働きかけるばかりではない」²¹⁾と述べている。言葉が感情と想像力に働きかけ、単なる「論証的」なものではない、ということがその論拠であるという。つまり、芸術と言語は「自立的で活動を媒介する」ことは共通としているが、そもそも芸術と言語が同じ道を進むものではないという概念を打ち出している。これは、『一般言語学講義』を著したソシュールが「言語」を抜きにした思考などない²²⁾、と述べた論に反駁しているものである。カッシーラーは、次のように述べる。

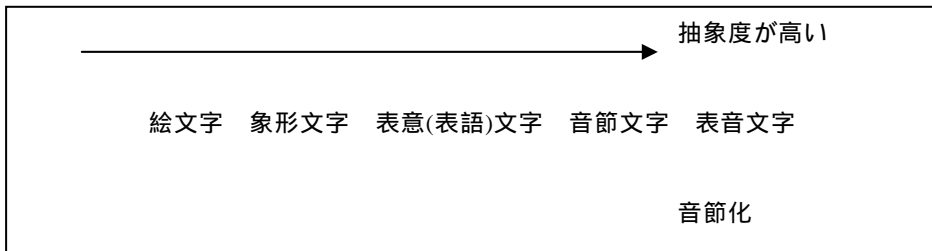
芸術においては、世界を概念化するのではなく、知覚化する。しかし、芸術においてわれわれが到達する知覚表象は、決して、伝統的な感覚論の体系の言語の中で感覚知覚の写しとか、淡き心像（イメージ）と表現されている知覚のことではない。芸術の比喩的描写は全く別の、否、反対の性格のものである²³⁾。

言葉が単なる意味論的記号ではないのはなぜかという、具体的には、そしてそのプロセスが、一般化と抽象化に向かうからである。この文字のイメージ・リテラシーは、「象形文字は形・色・図像の結合、支持体の象徴空間の配置 - 全体のレイアウト - からコード体系が必要である。表意文字は音声的字体体系への、書かれたもののアルファベット化への移行を示している」²⁴⁾

というものである。

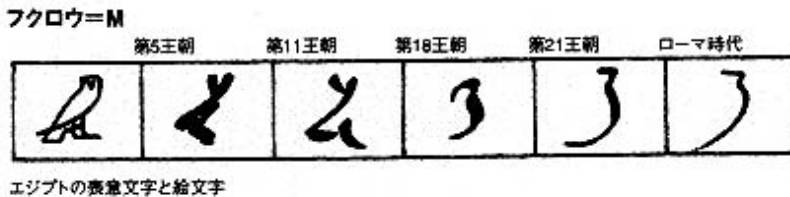
アルファベットの単語は、図1のように、イメージの抽象度が高く、漢字のイメージを取り込むことによって、さらなる文章の想像力を働かせて読み書きする日本語と、その働きが違うからである。そもそも、文字には図像からイメージされるものがある。アルファベットの単語は日本語の語彙とはなり得ない。その理由として、アルファベットの単語はイメージの抽象度が高いからである。さまざまな文字を分類し、カッシーラーの考えを当てはめれば、図1のように、右に行くにしたがって、抽象の度合いが高くなる。道路標識などに書かれている、あるいは、ケータイなどに使われる絵文字と、アルファベットの表音文字とは、それぞれ抽象の度合いが違う。

図1 イメージの抽象度



(上松恵理子 2006年)

このような順番で、文字の抽象度は低くなる。例えば、ふくろうの例がある。



(F・パルフェ『メディア・リテラシー工場』2006年)

このようなフクロウの M はエジプトの絵文字の形が変化する移行過程と理解することができる。「漢字は表音文字に比べ、きわめて多数の要素からなる文字集合という性格」²⁵⁾がある。漢字混じりの日本語はイメージの抽象度が、おのずと、アルファベット文字とは違ってくるのである。漢字の誕生のきっかけとして絵文字ができ、記号や絵文字は意味を直接表していた。「しかし、意味は千差万別であり、それを表現する人間によって、解釈にゆれが生じやすい。そのような効率のわるさを解消するために、絵文字が言語そのものを表す工夫がされた」²⁶⁾のである。このプロセスは人間の目を通して、生の現実(実物)からこれらの文字視覚的次元での意味作用とは音声の結合と考えられる。そして「言葉は心像(イメージ)やいろいろな情緒

をこめられたもの」であり、文字の抽象の度合いによってその意味の生成作用は変わってくると考えられる。「文章を読むとき、文字や語のイメージとしての次元は<忘却>される」²⁷⁾といわれる。表音文字は抽象度が高く、イメージの喚起力が弱いと言えるからである。これは、表音文字、アルファベット圏の理論である。ソシュールの理論は、アルファベット圏の理論だという見解を示している石川は、テキストの中の言語について、日本語の特徴も交え、ソシュールに批判的な立場をとっている。そもそも日本語は漢字が言語構造に組み込まれている。そして、とりわけ日本語において、文字は言葉の内側の出来事であり、言葉に内在的な出来事であるとして、批判を展開している。

ソシュールは文字を単なる言葉の表記つまり音写にすぎないものとして、貧困なものとしてしかとらえておらず、したがって、言葉自体もまた、ずいぶん貧困なものとしてしかとらえられてはいない²⁸⁾。

例えば「日本語に生じる言語現象」として、「前言葉」という概念を取り挙げている。これは、言葉というものが触覚を基盤に成立しているということであり、「一種の全身体的な前触覚や触覚を基盤に成立している。」ということである。音は何か、文字数は何か、文字の形はどうだったかという連想する。「発語の深みを踏まえた上で、言葉や文字の問題を考えねばならない。」といった考え方は、言葉の問題を普遍的にとらえるのではなく、その文化がどのような文字を使うかによって、言語学をとらえなおす必要がある、ということである。そして、文字とは、単に保存性のみ機能を持ち合わせるだけでなく、文字の誕生によって「文字を言葉の構造に組み込む」といった行為による、言語構造の転換がなされていくのである。このことから、日本語独特の意味生成作用があることを指摘することができる。

3 明治のメタテキスト

明治の時代は、文字を西洋のように音声に近づけようとする考え方と、漢字の特性を理解し、これまでの漢字混じりの文章を推進しようとする考え方に二分されたことが特徴である。しかし、日本語は後者の考え方によって現在に至り、そのため日本語特有なリテラシーが生まれた。そして、それは、文字や文章を読み解く際に、うまくイメージを取り込む作用が生成された要因となった。

前田は「透明な記号の背後に観念、思想、内面、美、高尚なものが描きだされなければならないとする文学観」²⁹⁾を述べている。具体的に制度としての文学の成立という面では、文学においては、批評家が登場したり、「没理想論争」³⁰⁾などがあった時期である。しかしながら、それとは真っ向から対立する考え方（=小説とは言語テキストである）³¹⁾は少数ながら斎藤緑雨

などに見られた。「言文一致の文体が持っているリダダンシー、冗長さというものをパロディの形であばいて」いた。具体的な方法として、緑雨は思想を空にすることにより、文体の冗長さを誇張したのである。

例えば、テキストのメッセージについて、「純然たる言語学的伝達などはけっして存在せず、複数の記号体系が相互に補完しあう広義の記号的活動がある」³²⁾と述べているが、これは、言語メッセージでさえ、さまざまな解釈を許容するということである。

小森は、文学テキストはあらゆる面で二重になっているので、記号内容と記号表現が一对一で結びついているというソシュール理論の考え方自体を否定している。例えば、次のようになる。

ソシュールの言語学は、たしかに言語の体系と、言語の背後にあると信じられていた実体論的観念や実体としての指示対象の世界を切り離した。しかし、記号体系としての言語における、記号内容の結合については、構造主義や記号学においても一对一の対応のままに置かれていた³³⁾。

テキストがあらゆる面で二重になっているという小森の概念は、「テキストとして」または、「メタテキスト」としてなのであり、その違いを理解するとともに、各々のリテラシーが必要となってくる。文学テキストの多様性は、文学テキスト自体にも多様な情報が挿入されているとともに、テキスト自らがその情報の中に挿入され組み込まれていく入れ子構造現象が起こるのである。このように、明治時代に「文学は<高級な>芸術」とする、制度としての文学が成立³⁴⁾した。しかし逆に、文学をテキストととらえる概念や受容理論などの文学の読みの方法が既に存在していた。受容理論は、1970年代にイーザー³⁵⁾が提唱している。また、U・エーコが時を同じくして、様々なテキスト論を書いている。エーコは、「テキストとは、その解釈の運命が自らの生成メカニズムに属するはずの所産なのだ。つまり、テキストを生成させるとは、他者の動きの予想が組み込まれた戦略を顕在化させることを意味するのだ」³⁶⁾と述べている。

日本でも 1980 年代頃には入ってきた今では読みの方法の 1 つとして確固たる地位を築いている読者論である。前田は次のように言う。

逍遙にとっても、あるいは鷗外にとっても、文学テキストは言語そのものであるよりも、むしろその背後に何を書くか、つまりフォームの背後にいかなるアイデアを置くか、ということが大きな問題であった³⁷⁾。

これらのことから、明治時代、既に文学をテキストとしてとらえる概念があった。メタテキストとしての理解や、その違いをとらえることもひとつのリテラシーである。

4 ツールとしてのリテラシー

明治の初期、19世紀後半は、教育に関する学校制度ができていく時代、識字率の向上が、読書人口の拡大に寄与したことは間違いないことである。識字率の飛躍的な向上は19世紀³⁸⁾であるが、20世紀に電子メディアが登場するまでは、書物による読書であった。しかし、識字率の向上を安易に喜ぶわけにはいかない。ライオンズは次のように指摘している。

19世紀の新たな読者には、中下層階級、すなわち社会的な地位向上を望む小市民、職人、ホワイткаラーも含まれ、彼らはいたるところ貸出し図書館の顧客の大半を占めていた。貸出公共図書館網がもっとも発達していたのはイギリスだった³⁹⁾。

このような公共図書館網がブリテン島に急速に発達したのは、都市化密度と、ヨーロッパの大陸にそぐわなかった地方行政の分散化によるものだった。貸出用公立図書館には政治的かつ人道主義的目的があった。工場に作られた学校と同様に、社会統制のための1つの道具であり、労働者階級の実直なエリートたちを、指導者階級の価値体系に組み込もうとするものだった⁴⁰⁾。

このように、社会統制の道具としてリテラシーが用いられる場合もある。明治の時代、明治の教育改革の理念の一つとして、義務教育制度を制定し、国家のための殖産興業、富国強兵等の人材養成を目的⁴¹⁾としている。ノディングスもこの論と似通ったことを述べている。

リテラシーは民衆がよりよい職業に就き、より良いサービスを受け、市民としての職務を知性的に行うことを可能にする。それゆえリテラシーの抑制は、完全支配の強力かつ明瞭な手段ともみなしうる。リテラシーがある民衆は、それだけ強力な消費者として、つまりカモとして働きかけの標的とされる可能性がある。何よりも、そうした民衆は、実際には自分たちにとって最善の利益とはならない政治的・社会的構造を受け入れることを納得させられてしまう⁴²⁾。

このように、リテラシーの中のツールとしての働きに目を向けると、リテラシーそのものにイデオロギーが内包されていることがわかる。道具としてのリテラシーを使いこなす受け手だった当時の民衆に対し、永嶺は「読書国民」という言葉を使い、新聞や雑誌、小説等の活字メディアを日常的に読むこの明治時代の国民のことを定義している。

読書国民によって意図されているのは、もはや識字率や読み書き能力の普及といった問

題ではない。むしろ、それに続く次の段階として読書習慣（reading habits）の国民的普及が目指されている。当時の言葉では「読書涵養」と表現されるこの読書習慣の国民各層への普及を通じて現れてくるべきもの、それが<読書によって形成された国民>読書国民である⁴³⁾。

さらに、永嶺は、読書国民形成の要件を2点あげている。

- ・ 読み書き能力と読書習慣の普及。（明治時代においての多くの小学校卒業者は一部であり、中等学校以上の教育を受け、中間層を形成した人たちとしている）
- ・ 読書習慣を獲得した人々に対して読むべき読書教材を継続的に提供すること。（さらにこの要件として、「中央の出版資本による発行」「近代国語によって書かれている」「近代的国民性を刻印された新しい活字メディアである新聞・雑誌・書籍」「全国的に均一に流通しうるもの」）

「江戸時代の読書状況と近代明治の読書状況は違う。」と述べた根拠は、このような教育や流通によって、変容したということである。その変容は同じ時代のヨーロッパにおいても類似性を見ることができる。近代的国民性を刻印された新しい活字メディアである新聞が、日本全国の共通の読み物となったことで、ここで日本語の全国的均一な文字拡散現象が初めて生じ、「中央メディアとその受け手としての地方読者という構図が明確にその姿を現してくる」⁴⁴⁾という統一的なものは、ヨーロッパの新聞メディアの発達と違いがあり、より画一的であった。

このようなことから、日本語においては、抽象度の低い漢字の共通イメージをお互いの共通コードとして認識し、話し合いのコミュニケーション行為が行われる。

おわりに

アルファベットなどの外来語は、その共通のコードが合致しないことにより、言葉イメージの差異によって、コミュニケーション行為の意味作用にずれが生じる。このようなことから、漢字を含む日本語特有なリテラシーというものが存在することがわかる。また、明治時代のモデルが日本語を読み解くリテラシーの概念の1つとなることがわかった。文字の伝統的な読み書きのリテラシーに加えて、日本語の現在の表記に至った経緯やその背景を知り、日本語表記の特質や、アルファベット文字との差異を理解することが、日本語を読み書きする際に学習者のテキストの理解に役立つと考えられる。これらを理解することは、日本人にとっての、日本語の新たなリテラシーである。

<注>

- 1) 平井昌夫『国語国字問題の歴史』昭森社 1948年、pp.8-9。
- 2) グリエルモ・カヴァッロ『卷子本から冊子本へ - ローマ世界における読書』大修館書店 2000年、P83。
- 3) 野村雅昭『日本語の働き』「講座日本語の表現2」筑摩書房 1984年、pp.15-16。
- 4) 天野郁夫『学歴の社会史 - 教育と日本の近代 - 』新潮選書 1992年、p.102。
- 5) 「上層中産階級の創出を、はっきり教育の目的にかかげた慶応義塾の場合にも、そこでの教育の中身は、経済学を主体とする『実学』であった」と天野は述べている。
- 6) ヨーロッパ的なオーソドックスな教養教育もアメリカのなりべラルアーツもこの時代には成立しなかったという。
- 7) 亀井秀雄『明治文学史』岩波テキストブック 2000年、p.60。
- 8) 平井昌夫『国語国字問題の歴史』昭森社 1948年、p.205。
- 9) 亀井、前掲書 p.61。
- 10) 平井、前掲書 p.211。
- 11) 平井、前掲書 p.216。
- 12) 同書同頁参照。
- 13) 野村雅昭『日本語の働き』「講座日本語の表現2」筑摩書房 1984年、pp.124-125。
- 14) 『現代雑誌九十種の用語用字(3)』国立国語研究所 1964年、pp.58-59。
- 15) 石野博史『日本語3国語国字問題』岩波書店 1977年、pp.200-229。
- 16) 石野、前掲書、同頁。
- 17) 石野、前掲書、同頁。
- 18) ジャン＝クロード・フォザ+アンヌ＝マリ・ギャラ他『イメージ・リテラシー工場』「フランスの新しい美術鑑賞法」フィルムアート社 2006年、pp.28-29。
- 19) 高橋世織『図像論』「読むための理論」世織書房 1991年、pp.328-333。
- 20) 高橋、前掲書、同頁。
- 21) エルンスト・カッシーラー『象徴・神話・文化』ミネルヴァ出版 1985年、p.219。
- 22) フェルナン・ド・ソシュール『ソシュール一般言語学講義』岩波書店、1972年。
- 23) エルンスト・カッシーラー、前掲書 pp.218-220。
- 24) ジャン＝クロード・フォザ+アンヌ＝マリ・ギャラ他『イメージ・リテラシー工場』「フランスの新しい美術鑑賞法」フィルムアート社 2006年、pp.28-29より。
- 25) 野村雅昭『日本語の働き』「講座日本語の表現2」筑摩書房 1984年、p.130。
- 26) 野村、前掲書、同頁。
- 27) ジャン＝クロード・フォザ+アンヌ＝マリ・ギャラ他『イメージ・リテラシー工場』「フランスの新しい美術鑑賞法」2006年、フィルムアート社 p.30。
- 28) 石川九楊『二重言語国家・日本』NHK出版 1999年、pp.14-p18
- 29) 前田愛『増補 文学テキスト入門』筑摩書房、ちくま学芸文庫 1993年から。
- 30) 夏目漱石と坪内逍遙に間で、明治24年から25年にかけて、「理想」の語義や「想(イデエ)」の有無およびその意義を中心に争った論争。前田愛 同書。
- 31) 前田によれば、それは斎藤緑雨だけだったと述べている。
- 32) ウンベルト・エコ『テキストの概念 記号論・意味論・テキスト論への序説』而立書房 1993年。
- 33) 小森陽一『読むための理論 文学・思想・批評』世織書房 2005年、p.9。
- 34) 前田愛 前掲書 pp.62-66。
- 35) 『行為としての読書』や『行間を読む』。
- 36) ウンベルト・エコ『物語としての読者』青土社 2003年、p.86。
- 37) 前田愛 前掲書 pp.62-66。
- 38) 19世紀フランスは男子の50%女子30%、イギリスは男性70%女性55%、ドイツでは民衆の88%に達したという結果がある。マーティン・ライオンズ『19世紀の新たな読書たち』大修館書店、2000年による。
- 39) マーティン・ライオンズ『19世紀の新たな読書たち』大修館書店 2000年、pp.473。
- 40) ライオンズ、前掲書、同頁。
- 41) 小林雅之『近代日本の教育と社会 明治の教育改革』放送大学教育振興会 1996年。
- 42) ネル・ノディングス『教育の哲学』世界思想社 2006年、p.114。
- 43) 永嶺重敏『読書国民の誕生』日本エディタースクール出版 2004年 p.43。
- 44) 永嶺、前掲書、同頁。

主指導教員(齋藤勉教授) 副指導教員(松本彰教授・佐々木充教授)